

何ともやりきれない話だ。「今年の漢字」が「北」に決まった十二月上旬、北朝鮮の拉致被害者、増元るみ子さんの母信子さんと、帰国した曽我ひとみさんの夫チャールズ・ジェンキンスさんの訃報が相次いだ。テレビニュースを見ながら、かつて聞いた話を思い出した。

一九九五年、警察庁の記者クラブを一人の老紳士が訪れた。娘が英国留学中に北朝鮮によって拉致されたらしいと言うのだ。この男性は年に数回、外務省や警察庁を訪れ、マスコミにもこの問題を取り上げてくれるよう依頼して回っていた。しかし当時、拉致問題はまだ記事として取り上げられる状況になかった。肩を落として記者クラブを去る後ろ姿が痛々しかったという。

男性は、二〇〇二年に当時の小泉純一郎首相が北朝鮮を訪問した際、北朝鮮側から死亡したと伝えられた有本恵子さんの父明弘さんだ。明弘さんは今年十一月、トランプ米大統領に面会し「娘の写真を見せ、ロンドンで勉強中にいなくなったと伝えたい」という。警察庁の記者クラブを訪れてから二十二年、恵子さんが消息を絶つてから三十四年。失われた時間の重みを感じずにはられない。

この小泉首相の訪朝時、官房副長官として同行したのが安倍晋三首相だ。安倍氏は当時、一時帰国と言われた曽我さんら拉致

## 今年の漢字と安倍政権

被害者を再び北朝鮮に戻すことに強く反対。毅然とした姿勢が国民の共感を呼び、故岸信介元首相の孫という血筋やテレビ映りの良い甘いマスクも相まって人気は沸騰。翌年には自民党幹事長に抜てきされた。安倍氏にとつて、拉致問題は首相への階段を駆け上がる契機となった「原点」とも言える。

衆院解散を表明した九月の記者会見で、安倍氏は核実験や弾道ミサイル発射を繰り返す北朝鮮への対応について「あらゆる手段による圧力を最大限に高める」「拉致問題解決に向け、国際社会でリーダーシップを発揮する。国民の信任を得て力強い外交を進める」と訴え、衆院解散を「国難突破解散」と位置付けた。

世界でも対外的に危機に直面している場合ほど、政権与党に対して国民の支持が高まる傾向にあるという。民進党の分裂や希望の党の失速など野党の「敵失」があったとはいえ、先の衆院選でも自公両党が三分の二超の議席を維持して大勝した。韓国の中央日報は「安倍政権が」有権者の危機意識を煽つて票を引き寄せた」と分析した。

その勢いを駆つて、ということなのだろう。安倍政権は十二月、長距離巡航ミサイル導入を発表した。政府は導入目的を「離島防衛の強化」とするが、北朝鮮への抑止力を高める狙いがあるのは明らかだ。北朝鮮の弾道ミサイル発射基地を破壊する「敵

基地攻撃能力」の保有は、憲法九条に基づき戦後日本が貫いてきた「専守防衛」の基本方針を転換することにはかならない。

こうした安倍政権の姿勢に疑問を抱いている人は少なくない。帰国した拉致被害者、蓮池薫さんの兄透さんもその一人だ。透さんは月刊誌「世界」で拉致問題が北朝鮮に圧力をかける「材料」にされているとし、「戦争などなつてしまつたら、拉致問題どころではなくなつてしまふ」と危機感を訴えている。

拉致や核・ミサイル問題をテコに北朝鮮の脅威を煽り、集団的自衛権の行使容認、専守防衛の方針転換、引いては悲願である憲法九条改正を果たす。拉致問題解決への思いを否定するつもりはないが、安倍政権の一連の行動を見ると、蓮池透さんならずとも北朝鮮問題が安倍氏が目指す安全保障政策の実現に利用されていると感じてしまう。

今年には横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されてから四十年でもあった。記者会見での母早紀江さんの言葉が忘れられない。「政府を信じてきたが、よかつたのか。本気で拉致被害者全員を救い出してほしい」。拉致問題は「国難」である以前に「家族」の問題だ。「原点」である拉致被害者家族の言葉に、安倍氏はどう応えるのだろうか。

ハ蒼V